

## まとめとして

### （もともと用意していたもの）

「配布資料2」を参照しながら、話を聞いていただければと思います。

お三人のご発表に共通するものは何か、を考えておりました。それはAIが浸透する時代だからこそ、子どもたちの情意や価値観・価値にも着目して、子どもたちが自分の社会的役割を果たすことのできる力を育成すべきである、といった主張ではないだろうかと思いました。

お三人がおつくりになった授業の根底にある「社会科論」も、そうした主張に叶ったものになっているとも思います。

お一人ずつ、もう少し丁寧に述べていきます。

岩坂先生のは、社会科論としては合意形成力育成科論になるのだと思います。

「まぶしいからカーテンを閉めてほしい」という子どもたちと「カーテンを閉められたら寒いからたまらん。あけてくれ」という子どもたち、この相反する要求を持つ2つの集団の間にどうやって合意を生み出すのか、ということで合意を生み出すために「ツールミン図式」の「留保条件」を使っておられました。まさに、水山先生が「熱帯雨林」の開発・伐採をどうすべきか、中学生たちに話し合わせたときに用いた手法です。

岩坂先生のカーテンの開け閉め問題などは、論理的に妥結点を導き出せるのだと思います。「論理的に」と言ったのは現在のAI技術でも妥結案を示せるのだろうということです。でも、岩坂先生がお書きになっているように価値・感情の部分で、妥結案を受け入れない子どもが出るかもしれない、そんな時にはAIは対処できないのだから、そういう時のために子どもにどんな力をつけたらよいのか、その力こそがAIが取って代わることのできない、人間力であるというのがご提言のポイントなのだろうと思って聞いておりました。岩坂先生の言葉を使って表現すると、「わかってはいるが、何かヤダ」という交渉相手を納得させるのに必要な力というのはどんなものなんだろうということで、岩坂先生はこれをご自身のこれからの授業づくりの課題として挙げています。

私に「それを示せ」と言われますと、大変つらい。正直なところ「わからない」と答えるしかないからです。会場の方たちでいいお知恵をお持ちの方がいればお聞かせいただきたいと思っております。

ただ、これだけでは丸投げであまりに失礼なので、社会科という教科がソーシャリゼーションを図るための教科である、という観点から、子どもたちの政治的ソーシャリゼーションを図るためにはこういうことができるのじゃないかということで申し上げたいと思います。

高学年なら「大人はどうやって物を決めているのだろうか」という課題での学びを単元の中に組み込めるのではないかと思うのです。中学年、低学年の場合には「お兄さん、お姉さ

ん方は学級の問題や学校の問題で話し合っても、みんなが良しということにならなかったとき、どうやって解決しているのだろうか」という学びを単元の中に組み込んではどうかということ。

つまり、「わかってはいるが、何かヤダ」という子どもがいて全員一致が見られない。そんなときの意思決定のルールを教える機会にすべきだろうというのが、私の考えです。これは子ども全体の政治的ソーシャリゼーションを図る学習になります。でも、先ほど申し上げたように学級の問題、それからどうしても納得しないという子どもにはどう対処すべきなのか、となると決定打となるような考えが浮かんで来ません。

岩坂先生が、また会場の皆さんがこのためにどのようなことをお考えになっているのか、あるいは実践されているのか、ぜひお聞かせいただき学びたいというのが正直なところです。

さて、森先生の場合には、「協創」という考え方を授業づくりの要にしておられますが、これは社会参画学習のバリエーションであると受け止めました。

森先生は「地域社会・企業と一緒に社会問題の解決に向けて創造的な取り組みができる」力の育成こそが、AI 技術が浸透した「超スマート社会」では必要なのだというお考えのもと、単元を構成されています。社会問題の解決案を生み出すためには、きちんとした社会認識が必要だということで、単元には社会諸科学論に基づいて応用のきく知識を学ぶパートが組み込まれています。「システム思考」という部分です。

こうした確かな社会認識に基づいたうえで、AI 時代にはそうした社会科学の知識を学ぶだけでは不十分である、異なった価値や価値観を持つ人間・組織と意見をすり合わせながら解決策を生み出していく力、すなわち、「創造的な対話力」、森先生はこれを「協創」と呼んでいます。これが大切なのだという明快な主張のもとに行われた実践であり、大変勉強になりました。

ただ、私の方で「なぜだろう」と思わされたことを2つ申し上げます。

一つは、「地域社会・企業」として、なぜ「国」が抜けているのかということです。「日本国政府から誰かに教室に来てもらって、子どもたちが考えたことに意見を言ってもらい、できれば子どもたちと「対話」を進めてほしいと思ってもそれは実践化できない。」ということなのでしょう。しかし、子どもたちの中には将来、中央官庁の官僚になる子もいるかもしれせん。また、政府が何をすべきか・できるかについて考える力を育成しなければ、民主政の担い手育成という観点からすると弱いのではないか、ということを見ると、国ができること・やるべきことを考えさせる、という局面のある単元を構成して、小学校高学年のカリキュラムに位置づけておくのは大事なことではないかと考えた次第です。

あともう一つ、社会参画学習の場合、そしてこれだけ AI 技術が進んできた時代においては「やるべきではないこと」を考えさせ、子どもたちの人権感覚を磨いておかななくてはいけないのではないか、ということをおもいました。

たとえば、小学校3年生にある「おみせの人の仕事」、これを単にお店の人が売り上げを伸ばすための工夫・努力だけを学習内容とするものにとどめず、お店の人が困っていることを取り上げる。そうすると、万引きという問題が出てくると思います。NPO法人「全国万引き犯罪防止機構」によると、全国の万引き被害額は年間4500億円に上るそうです。

そこで「アースアイズ」という会社がAIカメラを作り、2018年から一台23万8千円（税別）で売り出したところ、「売れ行きは好調で、導入後に万引き被害が激減した店もある」（読売新聞、1月26日号（12版）「くらしIT」）という紹介記事がありました。このカメラ、「AIガードマン」というようです。

“この「AIガードマン」をもっといろいろなところで使えないだろうか。犯罪の少ない社会にするために「AIガードマン」をどこに置くといいだろうかという問題を組み込み、その中で「技術的には可能だが、やるべきではないこと」について子ども同士で「対話」させる、さらに弁護士の方のお話を聞かせるという学習を展開し、子どもたちの人権感覚を磨いていくといった単元づくりができるのではないかと考えました。

今、ごく粗く提案した学習は、<sup>かみの</sup>神野先生のプリントにある「3 高度情報社会における資質能力」の3番目に挙げられているもの——個人情報保護と権力側による個人監視——の問題をどう取り上げるべきかという問題意識と重なるものだと考えています。ですから、<sup>かみの</sup>神野先生には、これについてどのような単元を考えていらっしゃるのか、お話を伺いたいと思っております。

もう一つ、<sup>かみの</sup>神野先生がお立ちになっている社会科論を私は～～と取ったのですが、それでいいか違うか、AI技術が浸透した時代に生きる子どもたちのためになぜその社会科論をとったのか、というお話も聞かせていただければと思います。

それでは「今後の課題」の話に移ります。

AI技術が浸透していく社会あるいは「超スマート社会」にかかわる「学習」としては、粗く言って3つ考えられるのではないかと、思っています。

一つが、AIができないこと、あるいは苦手なこと、そういったものを伸ばすための学習です。3人の先生方からこれとして出されたのは「子どもたちの価値や価値観の醸成」でした。ですが、他にもあるのではないかと。たとえば、AI時代には人間の芸術的な創造性なんかを伸ばす学習が必要だということも言われています。社会科でも「働く人たちの工夫・努力」「先人たちの事績」を学ばせたところで、まとめとして「新聞づくり」ではなく「歌づくり」をさせるなんて言うことだってできるはずですよ。NHKの番組を2分だけ見ていただきます。東武動物公園で働いている人たちから、苦労話などを聞き取った後に作られた歌が登場するシーンです。

さて、「超スマート社会」にかかわる「学習」の二つ目は、AI技術を活用して可能となる社会改善についての学習です。これは、本日の森先生のものが具体例となりますが、もっともっとこれから教材開発されるべきところだろうと思います。

最後、3つ目は、今日、授業プランが具体的に示されなかったところですが、AIが活用される社会で個人を守る仕組みを作り上げる力を育成する学習です。AI技術にはどんな危険があり、それをどう防ぐか。少なくとも、政治的な視点と経済的な視点、ですから小学校5年生と6年生の学習として単元開発していく必要があるだろうと思ったところです。

以上、まだ十分に見えていないところもあるかと思いますが、今日の私の話はここまでいたします。

### **（前日のシンポジウムを受けて前日にホテルで書き直したもの）**

今のお三人の発表、それから昨日のシンポジウムを受けて、社会科に取り組む者がAI社会に関連してどんな授業を創らないといけないのか、あるいは作ることができるのか。これについて考えたことをお話しさせていただきます。ですから、お手元の配布資料2だと「今後の課題」を修正したかたちでお話しすることになります。

AI社会に関連して社会科においては次の3つの教育が必要かなと思いました。一つ目が「① AIに負けない資質・能力を育む教育」、二つ目が「② AIの活用により、よりよい社会を創る力を育む教育」、そして三つ目が「③ AI社会に潜む危険に気づき、個人を守る仕組みを考え出せる力を育む教育」です。この3つのどれを落としてもいけない。だから一つひとつの授業を改善するというにとどまらず、社会科のカリキュラムそのものを見直す必要があるだろうと思います。

さて、今日の岩坂先生、森先生のご発表は、①に該当するものだろうと思いました。お二方とも、多様な他者、時には対立する他者と協力して合意を形成できる力を育成しようとしている授業を提案されました。こうした「対話力」・「コミュニケーション力」こそがAI時代だからこそ必要な、そしてAIに負けない人間を育てるための教育だという主張のもと、提案されたのだと思います。

もちろん、私もお二人と立場を同じくするものですが、この他にもう一つ、社会科の学習活動を工夫することによって培うことのできる力があるのではないかと考えています。それはArt力です。芸術的な活動を「まとめ」の学習として入れることができる、いや、入れた方がいい、ということです。社会科の「まとめ」というと、新聞づくりや発表資料作りですが、歌や紙芝居というかたちでまとめてもいいのではないのでしょうか。その方が共感力を伸ばすだろうと思うのです。具体的なものをお見せしないとピンとこないですね。時間がありましたら、用意したDVDをお見せします（NHKの番組「骨の髄まで歌います（“東武

動物公園で働く人たち”編」をこの話の終わりに見せることができた。司会の松岡先生のご配慮と岡山大学の院生である金縄さんが機器操作に協力してくれたお陰であった）。STEM教育ということが言われていますが、そこにArtのAを加えてSTEAM教育こそが大事だということも言われています。この考え方を入れたものです。

さて、二つ目の「② AIの活用により、よりよい社会を創る力を育む教育」、これは森先生のご提案の中にはっきりと読み取ることができます。少子高齢社会で公共交通機関がなくなる地域が出てきている。しかも「高齢者は運転免許を返納せよ」という世論が何となく作られている。こうした高齢者、住民の足の不便をどうするかといった社会問題をどう解決すべきか……ということで自動運転車、AI自動車が走れるようなまちづくりを住宅メーカーの人たちと一緒に、つまり「協創」しようじゃないか、そうした力を子どもたちにつけようじゃないかというのが森先生が提案された授業でした。ただ、そのAI自動車が事故を起こした時どうなるのか、その点の法整備について考えるという側面が欠けていたのではないかと、思います。これは森先生を責めても仕方がない。森先生がなされたのは今の小学校5年生の「産業学習」単元においてです。今の学習指導要領社会科ではここには、「法教育」は含まれない。だから、仕方がないのです。これが先程、カリキュラムの見直しが必要になるといった意味です。

最後の3番目の教育、つまり「③ AI社会に潜む危険に気づき、個人を守る仕組みを考え出せる力を育む教育」ですが、これには神野先生が提案された授業が該当します。「個人情報保護と権力側による個人監視」、また「オプトアウト権」にかかわるところです。もうこういう授業を小学校5年生に行っておられるというのでびっくりしました。附属小の先生方は嫌がるかもしれませんが、「附属小だからこそできた実践」と言えるのかもしれませんが。5年生の学習範囲を超えた内容になっていますから。でもAI時代を意識したら、必要になるのではないのでしょうか。私は小学校3年生の「お店で働く人たち」という単元においても、人権感覚を磨くための法学習は可能だし必要ではないかと考えています。具体的に言います。この単元で、万引き防止のためのAIカメラを取り上げるのです。つまり、お店で働く人たちがお客さんのためにしている（と多くの授業では意味づけますが、売り上げをアップさせるためという意味も当然あります）工夫・努力を現行の学習指導要領に従って学ばせた後、お店の人たちが困っていることって何だろう、と学習を進めていくのです。万引きということが必ず出てくるでしょう。読売新聞（1月26日版）によれば、全国の万引き被害額は年間4500億円に上るのだそうです。こういう現状があるから「アースアイズ」という会社がAIカメラを創り、2018年から1台28万8千円（税別）で売り出したところ、「売れ行きは好調で導入後、万引き被害が激減した店もある」ということです。このカメラ、AIガードマンというそうです。お店の人の単元にこの万引き被害、AIカメラという要素を付け加えて、“この「AIガードマン」をもっといろいろなところで使えないだろうか。犯罪の少ない社会にするために「AIガードマン」をどこに置くといいだろうかという問題を組み込み、その中で「技術的には可能だが、やるべきではないこと」について子ども同士で

2020年2月23日  
於：社会系教科教育学会  
吉田正生（文教大学教育学部）

「対話」させる、さらに弁護士の方のお話を聞かせるという学習を展開し、子どもたちの人権感覚を磨いていくといった単元づくりができるのではないかと考えました。小3には早すぎる内容だと言われるのかもしれませんが、自分としてはチャレンジしてみたい内容です。もう40年も昔ですが、私が担任していた小学校3年生の子どもが近所のスーパーで万引きしてつかまりました。小学校3年生の子どもにも万引きは決して関係ないことはありませんから。でも、この内容をやるのは、今の学習指導要領社会科の内容では無理ですよ。公立の小学校では多くの先生方が二の足を踏むだろうと思います。

それでは最後のまとめです。AI社会を意識した社会科の授業構成は、これまでの社会科論に基づくだけで可能なのか。頭の中で考えているだけではわからないだろうと思います。まず、森先生や神野先生のように既成の単元の中にAIに関わる学習内容を取り入れて単元構成を試みる。そうすると例えば、今までの社会参画学習や合意形成力育成科の考え方からはみ出る部分が出てくるかもしれません。そのはみ出た部分を理論化する過程で新しい社会科論が生まれるのかもしれません。本学会にそうした発表が登場する日を楽しみにしております。

（この後、上の書いたようにDVDを流した）